

コナガの室内淘汰によるフェンバレレート抵抗性の  
発達および野外個体群のピレスロイド剤抵抗性

佐々木善隆

感受性個体群及び、香川県内から採集したコナガのフェンバレレートでの淘汰による抵抗性の発達、抵抗性個体群の累代飼育による感受性の復元、淘汰個体群の各種ピレスロイド剤の交差抵抗性を検討した。さらに香川県内数種個体群のピレスロイド剤感受性についても検討した。

1. フェンバレレートでの淘汰によって、感受性個体群の抵抗性発達は小さく、塩江 82 個体群は R/S 比で 25 にまで発達した。一方、琴南 85 個体群は 6 世代の淘汰で R/S 比は 1340 にまで発達した。
2. 琴南 85 個体群をフェンバレレートで 4 世代と 6 世代淘汰した個体群はフルシトリネート、パーメスリン、フェンプロパスリン、サイパメスリン、フルバリネートおよびシクロプロスリンに対して高い交差抵抗性がみられた。
3. 琴南 85 個体群を室内で累代飼育すると 7 世代で  $LC_{50}$  は感受性個体群とほぼ同じになった。琴南 85 個体群をフェンバレレートで淘汰した個体群も R/S 比が低い場合はその後の累代飼育で早期に感受性が復元した。しかし、極めて高い抵抗性に発達した個体群は感受性の復元は小さかった。
4. フェンバレレート抵抗性個体群はフェンバレレートに PB あるいは IBP を加えることで共力作用がみられた。
5. 1986 年秋から冬にかけて採集された香川県内のアブラナ科野菜産地のコナガはフェンバレレート・ジメト工ートとパーメスリンに高い抵抗性がみられた。